



和歌山県学習到達度調査について

この調査は、県の教育委員会が、4年生は国語と算数、5年生は国語・算数・理科の学習の調査をしたものです。すでに個人の結果については、お子様を通じてお返ししています。ここでは本校の概要についてお知らせします。

1. 結果・傾向

(1) 全体的には一

- ① 4・5年生ともに、国語と算数は県の平均より低いという結果である。5年生の理科は県平均並みであった。
- ② 特に4年生では国語、5年生では算数で県との開きが大きい。
- ③ 3・4年生での学習事項が、身につけていない傾向がある。

(2) 学年別では一

① 4年生

- ・国語の無回答率(何も書いていない割合)が高い。誤答率(書いて間違った割合)はそれほどでもない。
- ・算数の無回答率は県平均並み。よって平均正答率も少し低いだけである。
- ・国語の基礎と活用の正答率を見ると、県と比べて活用での差が大きい。
- ・国語の正答率分布を見ると、正答率30%以下の児童の割合が高い。

② 5年生

- ・国語も算数も、無回答率が高いわけではない。
- ・理科は県平均並みで、2019年度4月実施の全国学力・学習状況調査では理科はないが、おそらくいい結果になると予想する。(今年2018年度の6年がそうであった)
- ・国語の活用が、県との差が大きい。
- ・算数の正答率分布を見ると、正答率が60%以上の児童の割合がやや低い。

2. 分析・考察

- ① 4年生は、(昨年度も同じだったが)このような形式のテストに慣れていないからであろう。
- ② 4年生の無答率が高いのは、大量の問題を「読んで」から、条件に合った答えを「書く」という一連の学習活動の経験が少ないからと考える。
- ③ 5年生は、プリントや問題でそのよう経験があるので、無答率が県と比べて大きな差がなかったと言える。
- ④ 正答率が低い児童は、基礎でも身につけていない事項が多い。

3. 対策・改善

- ① 6年生で受ける全国学力・学習状況調査で、それぞれが力を発揮するためには、特に3年生からの学習活動や学習経験、習熟の積み上げが必要である。
- ② 5年生の時点からのプリントや問題の学習で、一定の効果はあると考える。
- ③ 教師との一問一答式の授業では改善は望めない。本校の研究している『読む・書く活動を大切にされた学習指導の工夫』について、学力向上を観点・視点にして進めなければならない。
- ④ 5年生の理科の活用での結果が県平均より高かったことが、ひとつの指針になるのではないかと考える。理科室には、**見つけよう〈課題〉**、**計画しよう〈予想・仮説〉〈計画を立てる〉**、**調べよう〈観察・**

【裏面に続く】

【実験】〈記録〉、【振り返ろう】〈考察〉〈広げる〉という掲示がある。6年生や5年生での調査で、本校の理科がよい結果となったのは、このような活動を続けてきたからだと言える。

.....
県や市において、学力向上という言葉がクローズアップされるようになって、何年が過ぎたのでしょうか。

『学問に王道なし（学問をするのに安易な方法はない）』という言葉の前にも紹介しましたが、地道な努力なしで四箇郷の子に学力をつけることはできません。保護者アンケートの「10. 子どもは、学習内容がわかり、基礎的な学力が身につけている」に対し、『よい方』の回答が79%でしたが、この設問に対する保護者の方の実感が、来年度はどう表れるかもひとつの指標となるでしょう。

「今日は研究授業だから」と言って、水曜日にお子様が早く帰ってくることもあったかと思えます。本校では、担任・担当全員が研究授業を行ってきました。目的は授業力向上のためです。市内小学校では、全員がそれを行う学校ばかりではありません。その意味でも本校の教員は研究熱心と言えるでしょう。

この年度末に冊子が出来上がります。各自が行った研究授業の《授業まで》と《授業の様子》、《授業の後》を記録に残すために行っているのです。その冊子の最初のページに、学力に対する私の思いや願い、考えを載せていますので最後に紹介します。

私は、本校の教育目標を「社会を生き抜く力を備えた子供を育てる」としました。そして努力点を、『学力の向上 ー長期的な視点と短期的な取り組みを整理し戦略的に進めていくー』とし、その具体的な方策の一番目に、〔学力向上を観点・視点にした研究授業を進める〕ということを入れています。

平成31年4月に6年生が受ける全国調査では、A問題とB問題が合わさった形式となり、これまで以上に大量の情報をいかに速く正確に処理し、条件にあった答えを導き出すことができるかがポイントになると言われています。考えてみれば、誰しも学校から社会に出て働く際には、迅速で的確な判断と根拠に基づいた対処が要求されることが多々あり、そしてそれらを広義にとらえるならば、テストの際に児童に求められている能力と同様とも言えるでしょう。当然、全国調査でわかるのは、何も平均点や順位のことだけではありません。出題の傾向を見ると、文部科学省が今求めている学力の一部分が垣間見え、ひいては、こんな能力を身につけた大人を育ててほしいという国の要望が見えてくるとも考えられます。

私は常々、人が社会の中で、つまり人が集団や組織の中で生きていくために必要とされる能力とは、「把握する力」、「想像・創造する力」、そして「伝達する力」だと思っています。さらに、伝達する手段として、映像や音声言語（話し言葉）よりも文字言語（書き言葉）が大切であると確信しています。自身の思いや願い、考えを書いて伝えることは、人として最も知的で崇高な行為であり、さらには、生きていくために必要不可欠なコミュニケーションツールであると考えからです。

四箇郷の子が、社会に出て働いて、家庭や家族をもって生活していくための力の一部分として学力が必要とされているならば、私達は真摯にとらえて、子供のために取り組んでいくことは当然ではないでしょうか。各実践と学校全体としての取り組みが、「社会を生き抜く力を備えた子供を育てる」ということを踏まえているか否かを念頭に置きながら、本冊子をご高覧していただければ幸いです。

平成31年3月

校長 上田 仁